

## 語意識に現れる音声パターン

(les patterns de la voix apparue lors de la conscience du mot)

小 島 慶 一

語というと、フランス語ではまず文法論的立場から品詞と呼ばれる小単位が考えられる。同時に音声学の立場から音声語という単位も思い起こされる。いずれもそれぞれの立場から機能を持っているが、特に音声語は心理的側面を供えて表出される音声の単位であって、一般には言連鎖の中にいくつかの音声的纏まりを示す。そして音声そのものは心理と直結した実体であるから、筆者が語意識の問題に触れようとする時は、音声語に大局の視点を置いていることになる。但し表題の語意識という時の語は音声語ではない。つまりその中に含まれる更に小さい単位、これは殆んどの場合文法論でいう品詞の単位に一致するものである。

そもそも音声語は *mot phonétique* の訳語であり、リズムグループとも呼ばれ、音声単位であり、意味単位である。そして音声語はその最後の音節に唯一のアクセントを有するというのが一般通念である。筆者が語意識について考えたのはこのアクセント観に対して疑問を持ったためである。Lucie de Vienne が音声語を、母音が数語に属していても、一語しか構成しないと感じられる一連の母音<sup>1)</sup>であると表現しているのは極論であり、音声語の中には実際様々の音調的起伏が認められる。これは音声語内部に於る語が何らかの意識の独立性を多少止めていることであろう。P. Delattre が、語が孤立した時にアクセントを受け得る音節はすべて、よ

---

1) Lucie de Vienne: *Nouveau Traité de Diction Française*, P. 148.

り正確には無アクセント音節というよりアクセント消失音節である<sup>2)</sup>としたのは正しい。確かに音声語を考える時に、語末(中)音節のアクセント消失は認められる。そして氏は更に続けて、このアクセント消失が完全なものから部分的と段階があることを指摘している。また孤立状態でアクセントを有する単語のすべての語末音節は、語群中では完全にアクセント消失しない傾向にあると述べ、その語が重要であれば一層アクセント消失は不完全である<sup>3)</sup> といっている。

そこで試みに筆者は資料として連接 (jointure) を取り扱った。例えば [ãsjalmã] が un signalement か un signe allemand かということであるが、いずれも音声語を成していながら、内部の個々の語の音声変化によって意味が異なる。書記法の違いは明らかに意味の違いを理解させるが、[ãsjalmã] を二つの異なる意味に分離するのは話し手の語意識による音声変化である。語意識は言葉のあらゆる場所に現れるが、その際むやみに語の音声変化を捉えても、そこが話し手の意識した場所でないかも知れないということがある。その点連接は話し手の語意識が現れる都合のよい資料である。

これをもとにして音声語という比較的明瞭な単位の中に於る微妙な語意識の変化を、実験音声学の立場から音声分析し、音声パターン化を試みる。資料を網羅することは不可能であり、本論はあくまで一試論であることを付記する。

## I. 聞き取り調査(昭和48年10月)

### a) 目的

話し手の語意識が聞き手にどれほど音声の相違として知覚されたかを観察する。

---

2) P. Delattre: Studies in Comparative Phonetics, p. 69.

3) P. Delattre: ibid. p. 143.

## b) 方法

資料は P. Delattre (Studies in French and Comparative Phonetics, p. 141) より借用。

被験者は日本人学生 18 歳～22 歳で英語既習。フランス語およそ七ヶ月既習。各例の意味を殆んど理解していないと思われる。しかし微妙な音声変化に気付くであろうと判断し、そこで各例ごとに音声の違いがあるか否かを一度だけ聞き取って貰った。二度以上の聴取は被験者の判断力が曖昧になると考えたからである。なお例はフランス人(女性 24 歳、パリ生れ、パリ育ち)が発音したもので、すべて何らかの音声特徴の違いがある。意味を理解しない被験者を扱った理由は、フランス語に堪能な適した被験者が得られなかったこともあるが、それでもこれら被験者には意味に代って音を忠実に聞き取ろうとする能動的態度があつて、こうした聞き取り調査は有効であろうと考えたからである。そして意味を理解する被験者の場合にも、実際に調査を行なわなかったが、いずれにしても理解の過程は音声の違いによって意味の違いに移動するであろうから、音声を聞く過程では両者に異なる結果を持たらすことはないであろうと思われる。逆に意味を理解する被験者の場合に、たまたま一方の意味を知り、他方の意味を知らない時は両例が同一であると見なす恐れがある。この時聞き手は音声を忠実に捉えていない。音声に現れる話し手の語意識が、聞き手の意味表象によってあやふやにされてしまうことがある。

この調査はコミュニケーションを考える時、聞き手の音声識別を調べるものである。話し手は聞き手を想定し、音声を介して聞き手に意味伝達しようとする。そして聞き手に対するこの調査は副目的で、主目的は話し手の実際の語意識を現象的に捉えることである。話し手の語意識の形態は様々であろうとは思われるが、その中でも聞き手がよりはっきりと知覚するのは如何なる場合であるか。この調査は補助的実証として為された。

## c) 結果

音声の相違に気付いた者の多い例を順に整理し、表 1 に示す。

識別者 数	発音 順	例		識別 者数	訂正者数	計	
例番 号	1	8	lais-les	elle est	168		0
	2	7	c'est du nerf	c'est d'une ère	151	×→○ 3	3
	3	17	l'eau très noire	l'autre est noire	137	×→○ 2	2
	4	1	la laine	l'haleïne	126	×→○ 13 ○→× 5	18
	5	13	laisse-les rentrer	laisse l'air entrer	124	×→○ 1 ○→× 1	2
	6	4	celui qui l'a vu	celui qu'il a vu	123	×→○ 1 ○→× 6	7
	7	20	c'est cela	cesse là	116	○→× 1	1
	8	3	un invalide	un nain valide	116	×→○ 2 ○→× 1	3
	9	18	l'encrier	l'encre y est	113	×→○ 2 ○→× 3	5
	10	14	les sentiers	laisse entier	111	○→× 3	3
	11	15	donna Pierre	donne à Pierre	94	×→○ 2 ○→× 1	3
	12	2	les aunes	les zones	87	×→○ 3 ○→× 2	5
	13	11	il est tout vert	il est ouvert	76	×→○ 2 ○→× 3	5
	14	19	il l'armait	il la remet	71	×→○ 3 ○→× 1	4
	15	9	On s'en dégoûte	On sent des gouttes	66	×→○ 4 ○→× 2	6
	16	10	un signalement	un signe allemand	54	×→○ 2 ○→× 1	3
	17	16	pas drôle	pas de rôle	42	×→○ 4 ○→× 1	5
	18	5	trois petites roues	trois petits trous	33		0
	19	6	il parle du nôtre	il parle d'une autre	28	×→○ 1 ○→× 1	2
	20	12	c'est un neut	c'est un œuf	23	×→○ 2	2

表 1 例は P. Delattre より

接続の例を扱ったのだが、各々の発音の中には多少不自然のものがある。それは言連鎖中の部分としてではなく、独立して発音しているためである。例(1)の elle est は例えば elle est Française, という場合の elle



est と違っている。本論ではこの場合 *hais-les* と *elle est* に於る [ele(ɛ)] で、*hais* が抽出されるか、*elle* が抽出されるかという意識の問題であって、*elle est...* というような言連鎖全体的なものは考えていない。これは話し手の語意識に関係する。こうした観点で得られたのが表 (1) であるが、それぞれの統計数に於て、全員が必ずしも即答したわけではない。各例の発音が同一ならば○、相違していると感じた時は×で答えるという簡単な調査だが、それでも訂正した者がかなり有り、訂正者数がある例に偏っているのも注意に値する。第一の例 *la laine, l'haleine* に訂正者が比較的多く出たのは最初のため心理的な不安定さがあったかも知れないが、その他の場合は何故であるか。これは後の音声分析結果と照合するとはっきりするだろう。参考のため訂正者数を表 (1) に付加しておく。

## II. 音声分析とパターンの試み.

### a) 目的

話し手の語意識を観察するために、意志伝達の際に現れる音声変化の構造を視覚的に捉える。

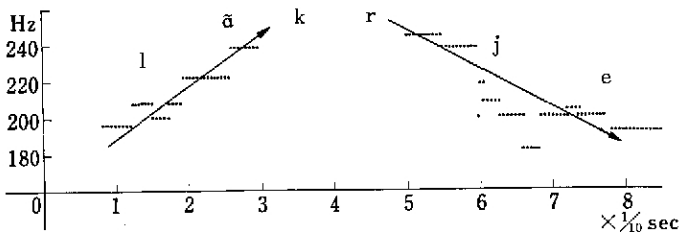
### b) 方法

カセットテープレコーダーに録音した話し手の音声を、実験器械により波形化し、それを実験音声学的立場から分析する。便宜的に表 (1) に纏めた順に従う。

### c) 結果

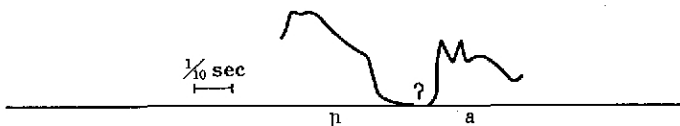
まずそれぞれの例についての分析結果を概略表記するが、その際筆者自身による表記法を説明する。

イントネーションを示すのには様々の方法があるが、本論では直線の向きにより表わす。例えばこれは *l'encrier* に於る高さや時間の関係である。(次頁上)上昇部に於て高さは段階的变化を示すが、この時間聞き手は、時間 1~3 の 2/10 sec 間におよそ 200 Hz から 240 Hz の変化を全体的に聞いているので表記は上昇直線で示される方がよい。下降部にも高さの起伏



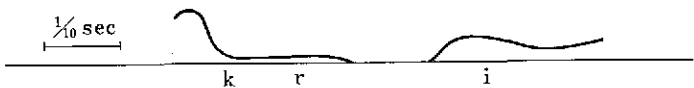
があるが、考え方は上昇部と同様である。

声門閉鎖は先行音の出涉りの急激な振幅減衰、波形消滅、後続音の入り涉りの急激な振幅増大の一連の変化から観察される。その中でも波形消滅が最大要素である。例えばこれは un signe allemand の場合である。

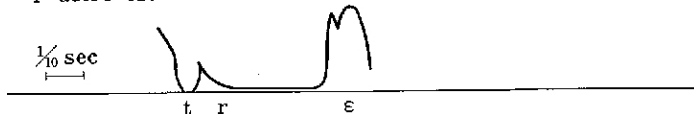


これと声門閉鎖を伴わない休止は / で示して区別したが、休止の場合は先行音の振幅減衰が比較的緩やかで、次に波形消滅がある時とない時がある。しかしいずれにしてもその持続時間が長い。後続音の振幅増大も緩かである。こうした場合は声門閉鎖ではなく休止とした。次の例を参照されたい。

l' encre y est.



l' autre est noire



長音は  $\cdot$ 、半長音は  $\cdot$  とした。但しこれはそれぞれの例に於ける相対的な時間の長さである。強音や氣息による声質変化は □ で示す。

1	{	hais-les	[ε̇?l̄c̄]
	{	elle est	[ε̄l̄ȯ?ε̄]
2	{	c'est du nerf	[s̄ēdynē:r̄]
	{	c'est d'une ère	[s̄ē?dynē?ε̄:r̄]
3	{	l'eau très noire	[l̄o·tr̄enwā:r̄]
	{	l'autre est noire	[l̄o:tr̄/ε̄nwā:r̄]
4	{	la laine	[l̄a?l̄εn̄ə]
	{	l'haleine	[l̄a εn̄ə]
5	{	laisse-les rentrer	[l̄ēs l̄ērāt̄re]
	{	laisse l'air entrer	[l̄ēs l̄ē:r̄?ūt̄re]
6	{	celui qui l'a vu	[s̄l̄q̄ik̄il̄av̄ȳ]
	{	celui qu'il a vu	[s̄l̄q̄ik̄il̄ȯ?av̄ȳ]
7	{	c'est cela	[s̄ēs l̄a]
	{	cesse là	[s̄ēs·/l̄a]
8	{	un invalide	[ən̄ē val̄id̄ə]
	{	un nain valide	[ən̄ē/val̄id̄ə]
9	{	l'encrier	[l̄āk̄r̄j̄e]
	{	l'encre y est	[l̄āk̄r̄/ī·e]
10	{	les sentiers	[l̄ēsāt̄j̄e]
	{	laisse entier	[l̄ēs·āt̄j̄e]

11	{ donna Pierre donne à Pierre	[donapjɛ:r] [dɔnəʔapjɛ:r]
12	{ les aunes les zones	[lɛ:zɔ:nə] [lezɔ:nə]
13	{ il est tout vert il est ouvert	[ilɛstuvɛ:r] [ilɛstuvɛ:r]
14	{ il l'armait il la remet	[il·larmɛ] [il·la·rɛmɛ]
15	{ On s'en dégoûte On sent des gouttes	[ɔ̃sãdegutə] [ɔ̃sã/dɛgutə]
16	{ un signalement un signe allemand	[œsɪjalmã] [œsɪjʔalmã]
17	{ pas drôle pas de rôle	[padrɔl] [pa·dɛrɔl]
18	{ trois petites roues trois petits trous	[trwapɛtɪtɛru] [trwapɛtitru]
19	{ il parle du nôtre il parle d'une autre	[ilparldynɔtrɛ] [ilparldynɔtrɛ]
20	{ c'est un neuf c'est un oeuf	[sɛ·tœnœf] [sɛtœnœf]

これらの音声表記をパターン化し(表2)、共通な最大要素を含むパターンを A, B, C, D に大きく分類し(表3)、それぞれの類の中から特徴的な例をグラフに示す。パターン化する際、記すべき音声変化がない時は示していない。

p = phonème    ? = 声門閉鎖    / = 高さ変化    • = e  
 / = 休止    □ = 強音、声質変化    : = 長音化    ° = 半長音化

例番号	渉り部音声表記	パターン	例番号	渉り部音声表記	パターン	例番号	渉り部音声表記	パターン
1	$\overline{p_1} \ ? \ \overline{p_2} \ p_3$	? →	8	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3 \ p_4$		15	$\overline{p_1} \ p_2$	
	$\overline{p_1} \ p_2 \ \cdot \ ? \ \overline{p_3}$	· ? →		$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3 / \overline{p_4}$	/ →		$\overline{p_1} / \overline{p_2}$	/ →
2	$\overline{p_1} \ p_2$		9	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$		16	$\overline{p_1} \ p_2$	
	$\overline{p_1} \ \cdot \ ? \ \overline{p_2}$	· ? →		$\overline{p_1} / \overline{p_2} \ \cdot \ p_3$	/ →		$\overline{p_1} \ ? \ \overline{p_2}$	? →
3	$\overline{p_1} \ p_2$		10	$\overline{p_1} \ p_2$		17	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$	/ →
	$\overline{p_1} / \overline{p_2}$	/ →		$\overline{p_1} \ \cdot \ p_2$	· →		$\overline{p_1} \ \cdot \ p_2 \ \cdot \ p_3$	· →
4	$\overline{p_1} \ ? \ p_2$	? →	11	$\overline{p_1} \ p_2$		18	$\overline{p_1} \ \cdot \ p_2 \ p_3 \ p_4 \ \cdot \ p_5$	· →
	$\overline{p_1} \ p_2$			$\overline{p_1} \ \cdot \ ? \ p_2$	· ? →		$\overline{p_1} \ \cdot \ p_2 \ p_3 \ p_4 \ p_5$	· →
5	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$		12	$\overline{p_1} : p_2$	: →	19	$\overline{p_1} \ \overline{p_2} \ p_3$	□
	$\overline{p_1} : p_2 \ ? \ p_3$	: ? →		$\overline{p_1} \ p_2$			$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$	
6	$\overline{p_1} \ p_2$		13	$\overline{p_1} \ p_2$		20	$\overline{p_1} \ \cdot \ \overline{p_2} \ p_3$	· →
	$\overline{p_1} \ \cdot \ ? \ \overline{p_2}$	· ? →		$\overline{p_1} \ p_2$			$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$	
7	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$		14	$\overline{p_1} \ p_2 \ p_3$				
	$\overline{p_1} \ p_2 \ \cdot / p_3$	· / →		$\overline{p_1} \ \cdot \ p_2 \ \cdot \ p_3$	· →			

表 2

この結果、パターン A、つまり声門閉鎖や休止のように間を置くことが最も多いことがわかり、次いで高さの変化と長音化が意識要因として大きい。/o/ や声質変化によることは語意識に際してさほど関与的ではない。

表3のパターン A の · ? → に例番号 16 が含まれるが、これは 54/170 名のみが識別したにすぎない。? のある時はこの表全体から見ると識別者

パターンの分類

	話し手の音声パターン	例番号(聞き手)	話し手の意識要因
A		1, 2, 11, 16, 6, 5, 1, 4, 7, <u>3</u> , 8, 9, <u>15</u> ,	声門閉鎖又は 休止のあるもの
B		5, 7, 11, 13, 17, 18, 10, 12, 17, 20, 9, 14,	高さの変化, 長音化 のあるもの
C		14, 17	əが出るもの
D		19,	声質変化によるもの

休止部に先行音が残る場合は  
例番号の下に線を付加する。

表 3

がもっと多く居て当然と思われる。16は un signalement と un signe allemand であるが, un signalement の [æ̃] 200 Hz, [i] 220 Hz, [a] 200 Hz と un signe allemand の [æ̃] 200 Hz, [i] 250 Hz, ʔ, [a] 200 Hz の高さの変化の形状が類似しているため, およそ 3~4/100 sec の ʔ が認識されなかったためであろう。このように然るべき場所に統計結果が現われていない場合は, 表 (3) に少々見られる。これはその例に識別を弱める共通要素が例 16 のように現われているためである。

表 (1) の訂正者数と表 (3) のパターンを照合してみると, 訂正者数が少ないということは, 音声的に比較的是っきりした相違が認められたわけで, 今例えば訂正者数 0, 1, 2 を考える時, その例番号は 1, 3, 5, 7, 18, 19, 20 であ

る。1, 3はパターン A に、5, 7はパターン A, B に跨がる。しかし 18, 19, 20 は音声の相違がないという迷わない認識のもとに訂正者が少なかったものであり、これは 1, 3, 5, 7 の音声の相違が明らかにあるという認識で得られた結果と統計数字の意味が異なる。だから 18, 19, 20 は捨象して差支えない。訂正者数が 3, 4, 5 の時、例番号は 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17 である。殆んどパターン A, B に跨がる。訂正者数 6 以上は 4, 6, 15 であるが、4 の場合は先述したが最初の例のため心理的不安定さがあったと思われるので捨象する。6, 15 の場合は興味ある。6 は 7 名の訂正者があったが、そのうち 6 名は ○ → × と訂正しているから音声相違に気付いたのであり、→ ? → のうちのいずれかの要素が残像となって音声相違に気付くために働いたといえる。15 は 6 名の訂正者があったが、そのうち 2 名のみが ○ → × と訂正している。6 の例よりも音声相違を識別していない。15 は 66/170 名が音声相違に気付いているから、104/170 名、つまり約 3/5 が同じ発音であると認識したことになる。15 のパターンは他の 8, 9 の比較的識別が多かった例も含まれるが、それでも識別者が少なかった理由は、8 の *un nain valide* の [ɛ] が 200~250 Hz [a] が 200 Hz, 9 の *l'encre y est* の [ä] が 260 Hz, [i] が 200 Hz に対して 15 の *on sent des gouttes* の [ä] が 260 Hz, [e] が 200 Hz でこれは殆んど 8, 9 と変りないが、但し [ä] の次の休止部が有声のため、*on s'en dégoûte*, のイントネーションに類似したためである。

次に各パターンについてグラフ化し説明する。グラフ作製の際、便宜上音韻による区分をしたが、音声は調音運動の連続移動変化の過程に生成される故にこの方法は厳密には正しくない。録音者の女性フランス人(先に説明)の声の高さは殆んど 180~250 Hz の間にあり、これの時間変化を点で示し、概略を太実線で表わした。強さは波形の振幅変化を点線で示し、これを音声学的に解釈して、強 0 弱の三段階に分け、太実線で示した。この三段階に分ける方法はひとつの試みである。そのために先ず筆者が母音について行なった実験の振幅比は次のようである。

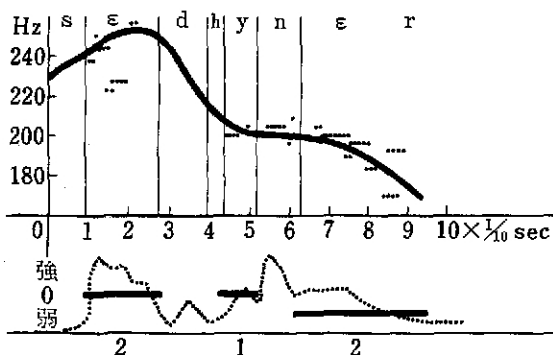
i	e	ε	a	ɑ	ɔ	o	u	y	ø	e	æ
1	2	2	3	2.5	3	2	1.5	1	1.5	2.5	3

この比でもって各々の例の母音について相対的立場から波形の振幅を再検討した。なお鼻母音については資料不足のため対応口腔母音と同比で示した。

パターン A,

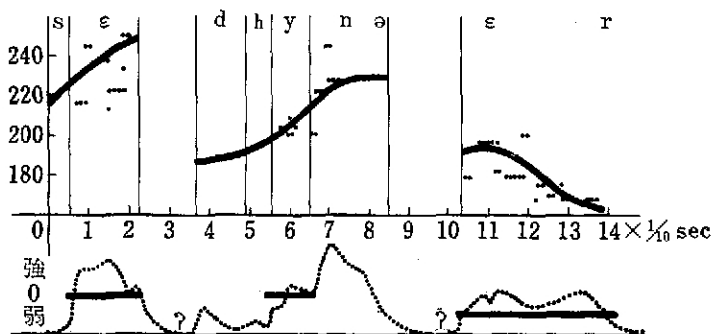
(C'est) du nerf. と (C'est) d'une ère. 識別者 151/170 名

C' est du nerf.



同じ強さの振幅比

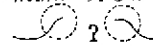
C' est d'une ère. (A)



同じ強さの振幅比

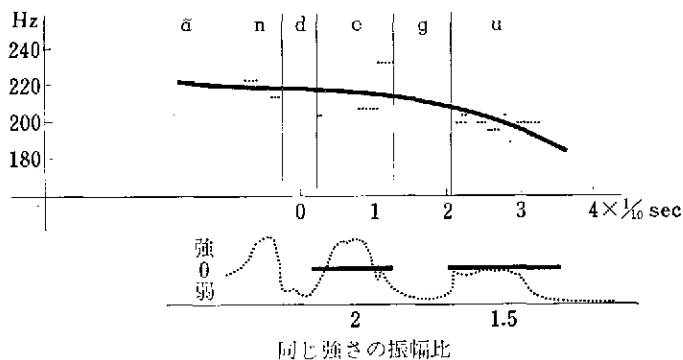


パターン A の中でも ? を含む例番号は 1, 2, 11, 16, 6, 5, 4 (表 3 参照) である。それぞれ多少の相違はあるが、2 の *c'est d'une ère* によりはっきりと ? が見られるのでこれを掲げた。

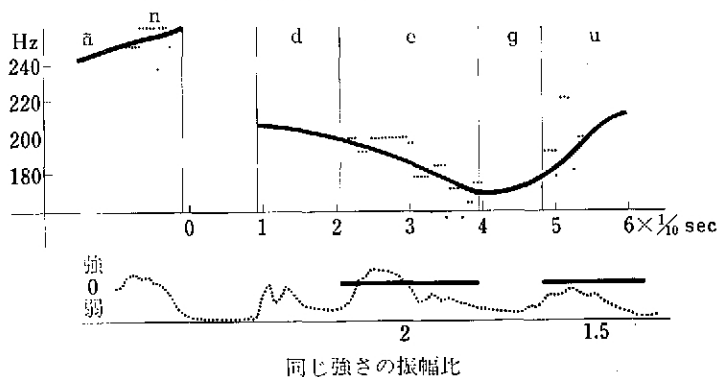
*du nerf* と *d'une ère* のイントネーションを比較すると、前者の音連続に対し、後者は音不連続である。これは *d'une* の後に休止があることを示す。そしてこの休止部に見られる波形の消滅は明らかに声門閉鎖を示しているが、このパターンはより厳密には  となり、声門閉鎖が *d'une* と *ère* を識別させる要因である。? の前後の音の出入り、入り涉りの形状にも特徴がある。点線の円で示す。

(On) *s'en dégoûte.* と (On) *sent des gouttes.* 識別者 66/170 名

*On s'en dégoûte.*



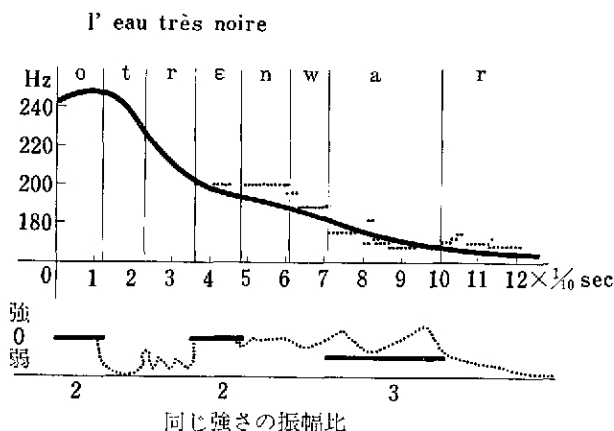
*On sent des gouttes. (A)*



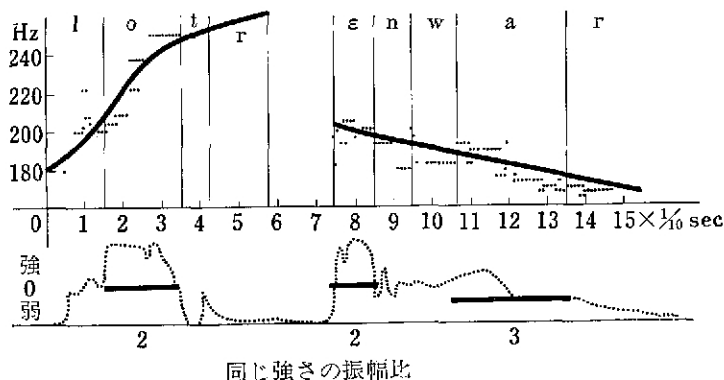
パターン A の中で / (休止) を含む例番号は 7, 3, 8, 9, 15 (表 3 参照) である。このパターン A は ? 或いは / のあるもので語意識が最も明瞭なパターンであるが、その中でも例番号 15 はこのパターン A に属しながら聞き手の音声相違識別に余り関与しなかったので掲げてみた。

sent des gouttes は、休止のある他の例とは少々異なる。普通は波形消滅を伴なうと同時に声門閉鎖がない。しかしこの例では波形消滅がなく、その結果声門閉鎖がないことになるが、これは意識の中断であって、そのため全体のイントネーションが On s'en dégoûte, に近づき、語の識別者が少なかったと考えられる。このタイプもパターン A に含めたため表 (3) では不規則な場所に現われている。このパターンにはより厳密には  $\int | \setminus$  と同時に  $\int | \setminus$  も観察された。

l'eau très noire と l'autre est noire. 識別者 137/170 名



l' autre est noire (A)



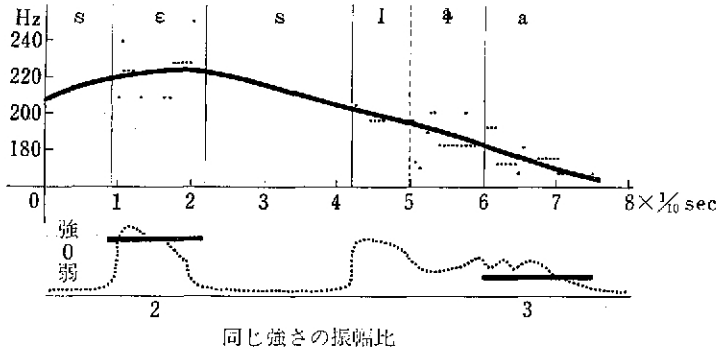
パターン A 中の / を含む中で、この休止に後続する音が他の例と違って強い。これは振幅の点から、又同時に聞こえの点からもそういえる。この聞こえの点について興味ある問題を含んでいるためここに掲げた。

*l'eau très noire* も *l'autre est noire* も強さの点からいうとどちらも 0-0- 弱である。しかしこれは概略の振幅比から、得られた波形の振幅を更に概略表示したものであるからあくまで目安である。だから両例の振幅変化を見ると相違がはっきりしている。まず *l'eau très noire* の [ε] は語中 [ε] であり、*l'autre est noire* の [ε] は語頭 [ε] である。先行 [r] の振幅の違いからも明らかである。この点からも両者の [ε] の違いは指摘できるが、聞こえの点について後続 [a] との振幅比に注意してみる。前例は [ε] [a] 殆んど同じ強さである。この時音声学的には [a] は [ε] より弱いと考えられる。後例の場合、[a] は [ε] より弱いのであるが、前例と違って振幅は [ε] よりも小さい極く弱い音である。この弱音 [a] は確かに [ε] が語頭であるという条件も加わっているが、相対的な聞こえという点からすると [ε] が一層強音と感じられる。常に先行、後続音との関係から音声学的判断に頼らねばならない。この例は休止があるからパターン A に属するが、その中でも休止に後続する強音を有するタイプとして掲げてみた。

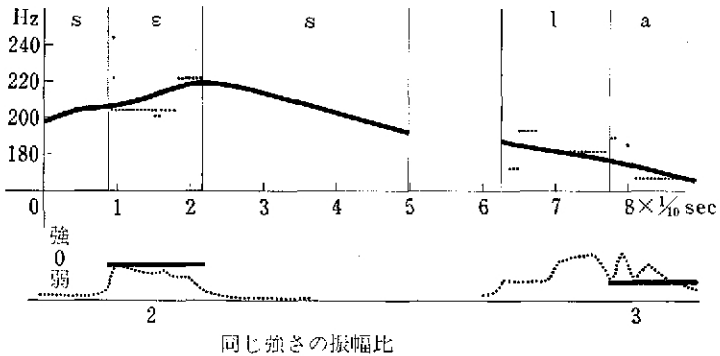
パターン B

C'est cela. と Cesse là. 識別者 116/170 名

c' est cela. (B)



Cesse là (A)

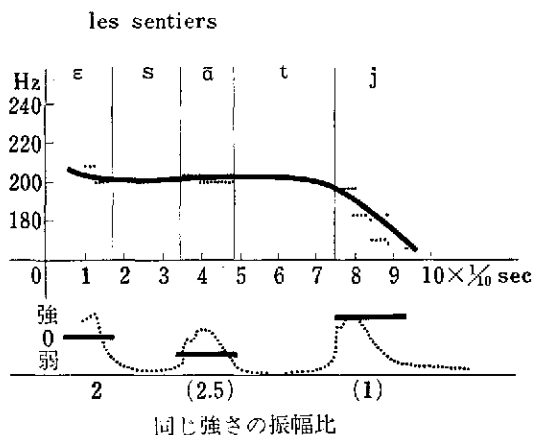


パターン B は話し手の高さの変化を意識要因として分類したが、その中で C'est cela. は Cesse là. (パターン A) と微妙な相違を示す。それでいて比較的識別者の数が多いので検討してみた。

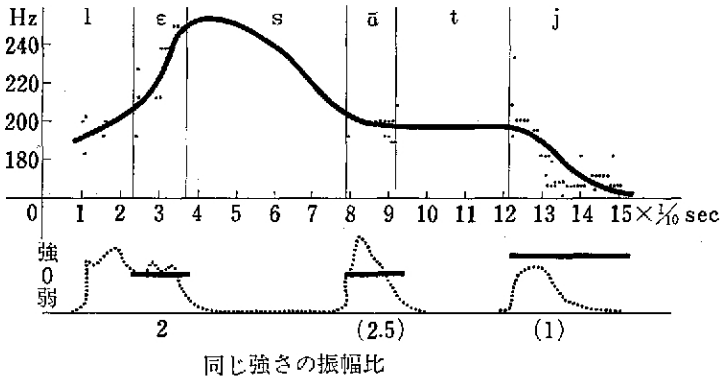
まず高さの変化であるが、C'est cela. に於て [se] の上昇部と [sla] の下降部とによって二語の意識に発音している。これを聞き手は Cesse là, と何らかの音声相違によって識別している。両例の高さの変化は全体的に

C'est cela, の方がいく分高いが、ほぼ同じ形状を示している。しかしよく観ると文頭 [sɛ] の高さの入り方が既に相違し、後続 [s] に大きな違いがある。C'est cela, の [s] は語頭で強く、休止がない。ところが Cesse là の [s] は語末で振幅減衰+休止で、決して là に結合しない。これは話し手の語意識に大きく関係していると同時に聞き手の音声相違識別となっている。話し手の語意識はこのようにパターンに表現できない音関係を含む。だからこの場合、強いて表現するならば C'est cela, は  $\overline{p_1} \overline{p_2} \overline{p_3}$  で、/s/ である  $p_2$  は /l/ の  $p_3$  と結合することをへで示し、Cesse là は  $\overline{p_1} \overline{p_2} / p_3$  とする方がより詳しい。しかし表(2)で示したように  $\overline{p_1} p_2 p_3$ ,  $\overline{p_1} \overline{p_2} / p_3$  の  $p_2$  の音声環境を考えれば、前者が語頭或いは語中音で後続音と連結し、後者が語末音であることは理解される。そして音韻の結合関係をパターンの中に持ち込むことはより繁雑になるので控えた。

les sentiers と laisse entier, 識別者 111/170 名.



laisse entier (B)



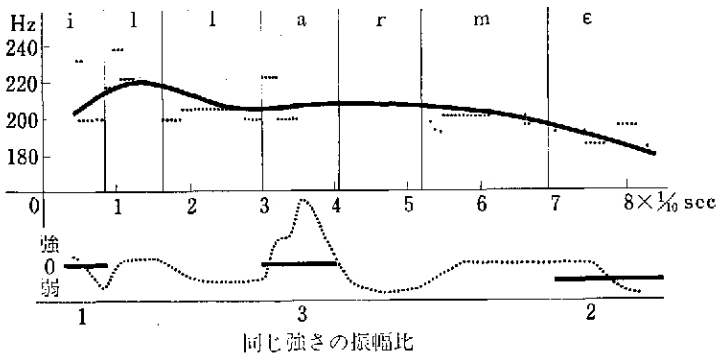
パターン B の意識要因である高さの変化が比較的明瞭であるので取り上げた。

laisse entier はイントネーションの形状を見れば明らかに laisse と entier が二分されて二語意識に発音されている。les sentiers は全体で一語意識である。laisse entier の [s] は [E] に後続し、長音化を示しているが、これよりもまず音の上昇部が語意識のために働いている。上昇部の後に語の切れ目がある。

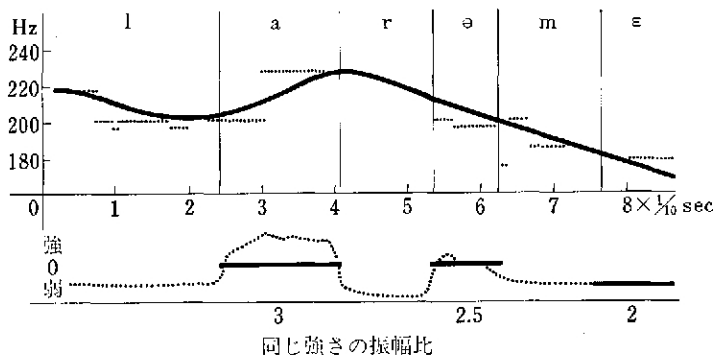
パターン C

Il l'armait, と Il la remet, 識別者 71/170 名。

Il l'armait.



Il la remet. (B) (C)



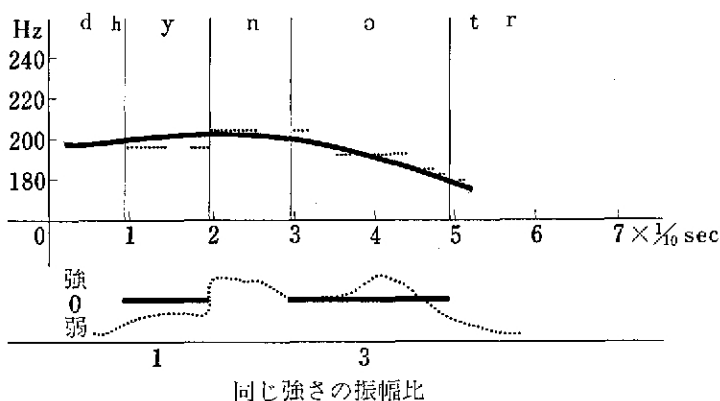
このパターンは [ə] の音が現われるもので、他に例番号は 17 があるが、より明瞭な方を選んだ。

[ə] を表出することによって語意識を保つということは、Il la remet の場合、文字 e を発音したに過ぎないといえは確かに語 remet の語中音として現われたのであって語意識には一見関係なさそうに思われるが、この場合 r(ə)met のように [ə] を脱落させることが可能である。ここにはパターン B の要素も含まれる。la のイントネーションは remet と分離されるが、[r] が [a] と結合し易いため、[ə] を意識的にはっきり表出したものである。聞き手にとっては時間的ずれとなって音声相違を識別させる。但しこの [ə] の出現は聞き手にとってはあまり重要性がないと思われる。というのは例番号 17 の pas drôle と pas de rôle に於てはイントネーションが殆んど同一で [ə] の響きの大小に観点が置かれているが、42/170 名が識別しているのみであることから判断される。図 (6) が 71/170 名であるのは、Il la remet, がパターン B とも関係しているからで、la の [a] の長音化とイントネーションの上昇調は、より大きな役割を果している。

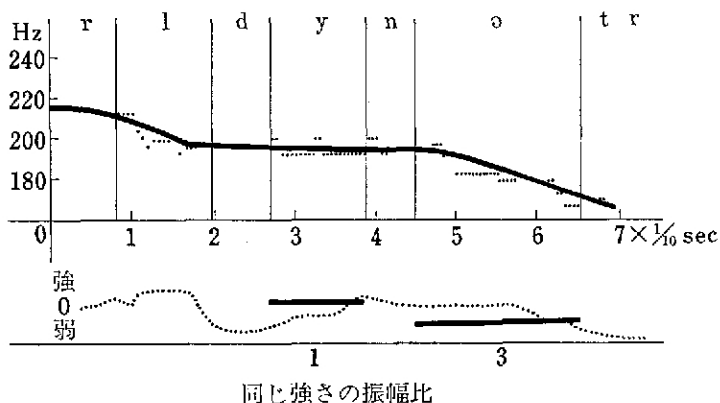
パターン D

(Il parle) du nôtre. と (Il parle) d'une autre. 識別者 28/170 名。

Il parle du nôtre. (D)



Il parle d' une autre.



このパターンに該当する例は 19 の一例のみであった。

このパターンは声質変化であり、特にこの例は氣息に關係するからグラフには示し難い。例えば du nôtre も d'une autre も、時間、イントネーションは殆んど同じである。28/170 名の識別者が居たことは、その要因を [y] の声質の相違と [y] [n] の涉りの強さの変化であると考えられる。



du nôtre の [y] は d'une autre の [y] よりも筋肉緊張を伴った音で、波形によれば前者に氣息を含む子音性が増大しているのが認められる。これは声質の相違となって現われる。但しこの要素は聞き手にとっては語識別にあまり関与的ではないといえる。

### III. 反省と結論

以上のように語を識別すると思われる要因を甚だ簡単にパターンとして分類し述べてみたが、この試みは意識に伴なう音声である故に個々のパターンは同時に記述し尽せない多くの現象を含んでいる。パターン設定についても細かに検討すれば更にパターンの数が増すのは勿論である。そのため現在のところ理解しにくい箇所もある。例えばパターン A の  $\rightarrow ? \rightarrow$  は二語に識別する最も重要なパターンであるが、ここに n°16 の結果的には聞き手の識別度の低かったものが分類されている。これは本論中にも触れたが、このパターン  $\rightarrow ? \rightarrow$  の識別度を低めようと働いた更に他の要因が加わったと考えられる。またこの聞き取り調査の方法にも問題があるだろう。N°16 の例について *signalement* とは無関係に *signe allemand* が一語か二語かという問いに対してならば恐らく違った結果だったと思われる。今回の方法は *un signalement* と *un signe allemand* は音声が同一か否かという問いに対して答える調査だった故に被験者の中には他の観点、例えば全体のイントネーションに注意を払い、この中に含まれる時間差などの要素は問題にしなかった者も居たかも知れない。なおこれはコミュニケーションの聞き手の立場であるから調査の結果は聞き手の主観性を含むが、パターンの方は話し手の音声を筆者の主観をできるだけ抑えて波形を分析し、構成したものであるからかなり客観的である。パターンは話し手を、聞き取り調査は聞き手を想定したものだが、コミュニケーションに於て、話し手の意識がどの程度に伝達されたかを補足的に聞き取り調査によって調べてみた。その結果表 (3) に纏めたように、話し手が最も多く表出するパターン A はであり、しかも聞き手にとっても最もよく識別している。これは声門閉鎖又は休止が語間に現われるもので、パターン B

は高さが高くなったところに語の切れ目意識がある。パターン C は音韻 /ə/ が出現し、パターン D は声質変化が語意識に対して主要因となるものである。しかしパターン C, D はあまり頻繁ではなく、聞き手もさほど識別していない。

語意識はアクセントやリエゾンのように様々の面から研究され得るが、今回は接続について特に話し手の語意識を音声分析し、またコミュニケーションの立場をを踏まえる意味から聞き手を設定し、両方の立場を照合しながらおおまかなパターン化を試みた。その結果を報告する。

以上

#### 使用器材

ソニーカセットテープレコーダー TC-1180

ソニーダイナミックマイクロフォン MTL・F-96

電磁オシログラフ〈ビジグラフ-P〉

感光紙アグファゲパルトオシロスクリプトディシャープ } 三栄測器 K. K.